

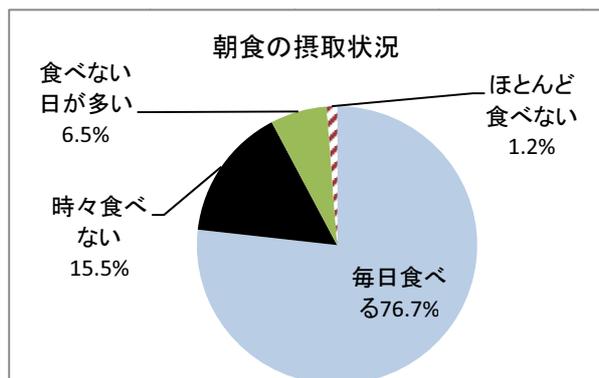
第3章 食をめぐる現状

1 ライフステージ別の現状

妊娠期・乳幼児期

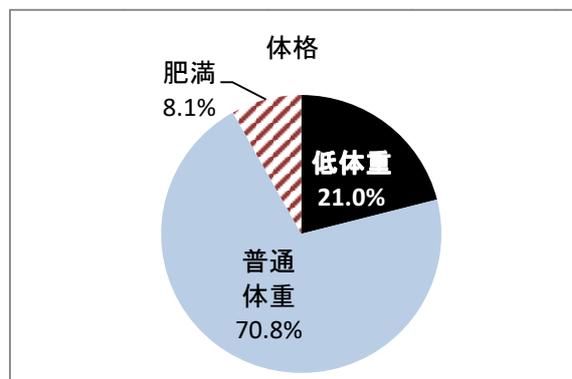
(1) 妊婦の様子（平成28年度母子健康手帳申請時 調査票から）

ア 朝食の摂取状況



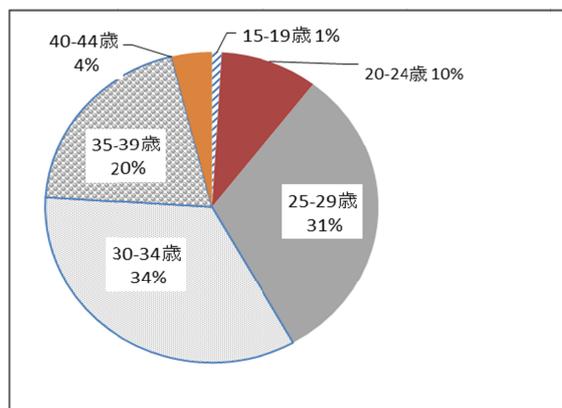
76.7%は朝食を毎日食べますが、妊娠中でも「食べない日が多い」「ほとんど食べない」という人が7.7%います。

イ 妊婦のやせの割合



妊娠届出時、70.8%は普通（適正）体重です。一方、低体重（やせ）の割合は21%、肥満は8.1%です。妊婦の体調管理は、本人と胎児の健康に影響します。

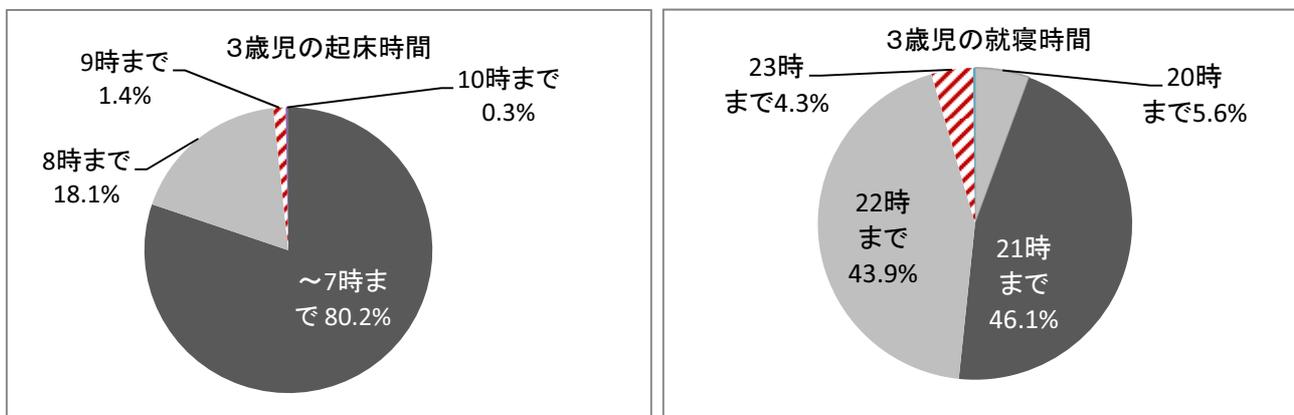
(2) 出産時の母の年齢（人口動態調査 平成23～27年合計）



出産時の年齢で最も多いのは、30～34歳が34%、次いで25～29歳が31%です。10年前と比較すると、出産時年齢は35～39歳、40～44歳の割合が増加傾向にあります。

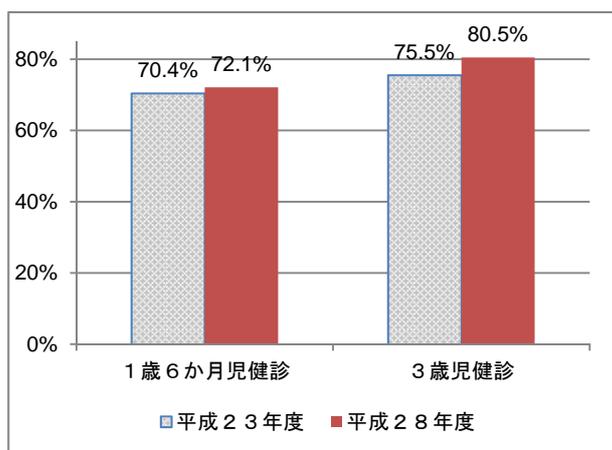
(3) 平成28年度乳幼児健診問診の結果から

ア 3歳児の生活リズム



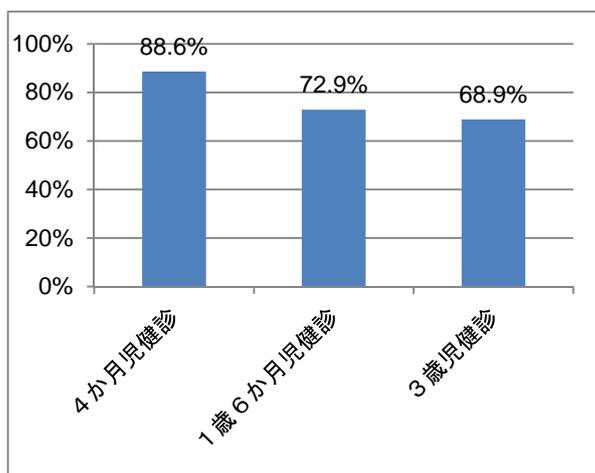
平成23年度と比較し、7時までに起床する子が3.3ポイント増加しました。就寝時間は遅くなり、21時までに就寝する子は5.6ポイント減少しています。

イ おやつを与える回数や時間が決まっている子の割合



おやつの回数や時間が決まっている子が増加しています。

ウ ゆったりとした気分で子どもと過ごせる時間がある母親の割合



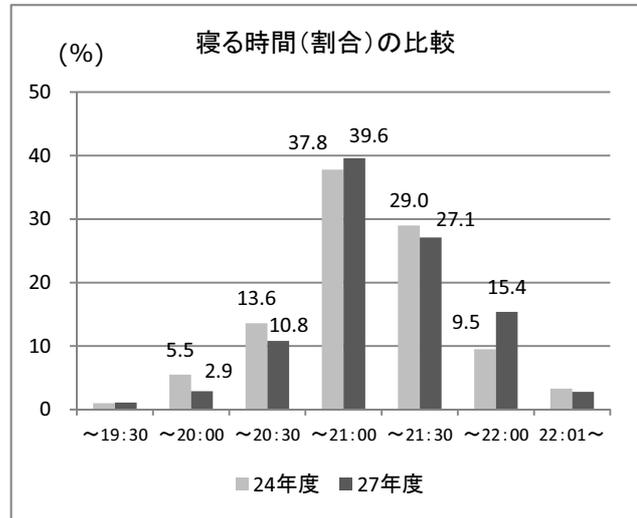
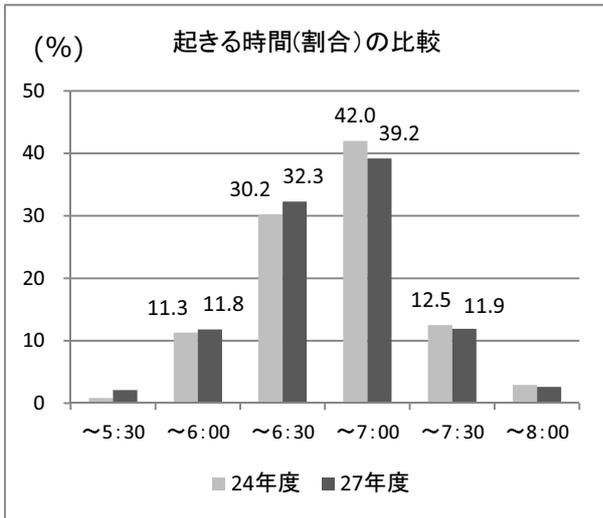
子どもの年齢が大きくなると、ゆったりとした気分で過ごせる割合が、徐々に低下しています。

(4) 市内保育園・幼稚園の4歳児、5歳児食育アンケート

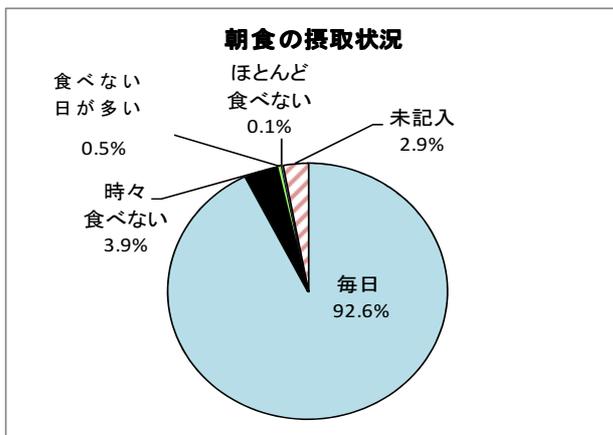
(平成27年度の結果から)

ア 生活リズムの状況 (起床時間・就寝時間)

7時までに起きる子の割合は85.4%、21時までに寝る子は54.4%でした。



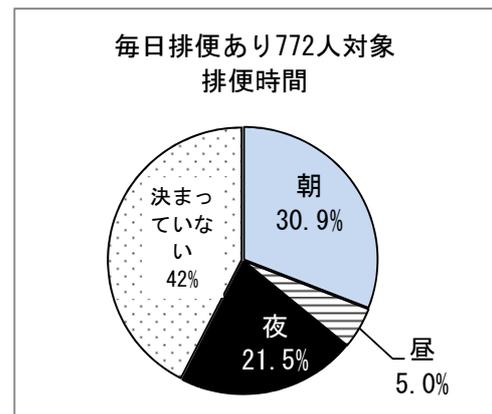
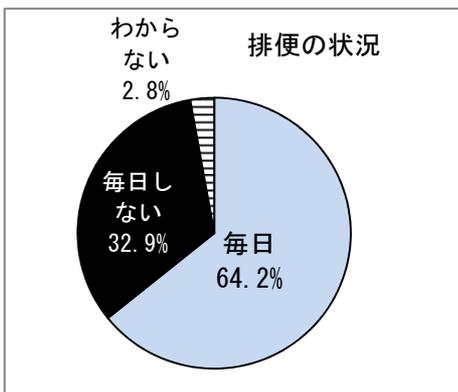
イ 朝食の摂取状況



朝食を食べる子が9割以上で、欠食することがある子は4.5%います。朝食を欠食する理由は「食欲がない」「時間がない」等です。

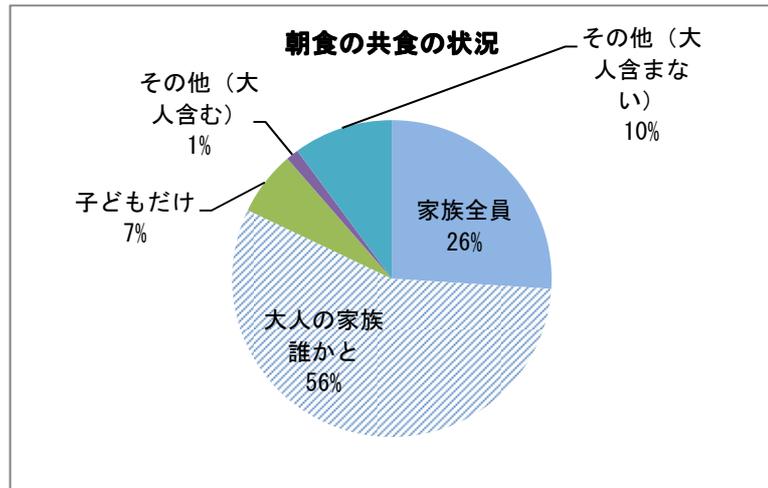
ウ 排便習慣

排便習慣が毎日ある子は64.2%です。そのうち、朝に排便習慣がある子は30.9%です。



エ ^{きょうしょく} 共食の状況

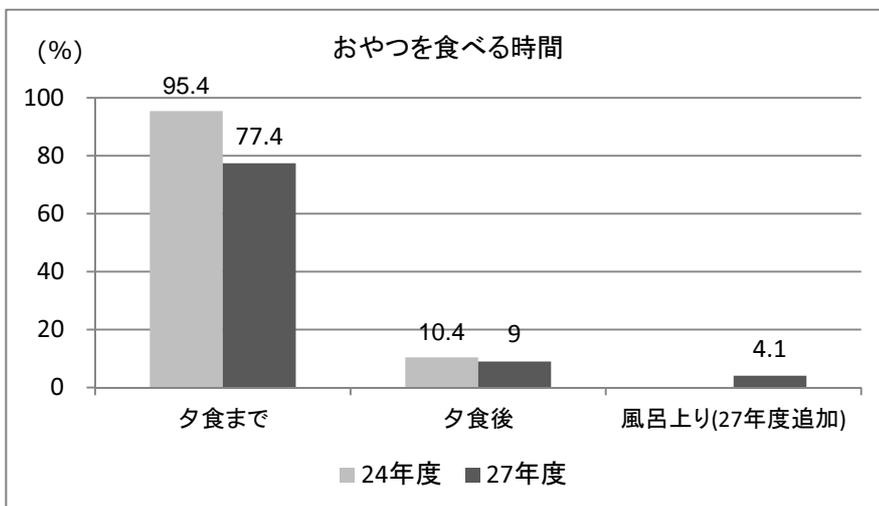
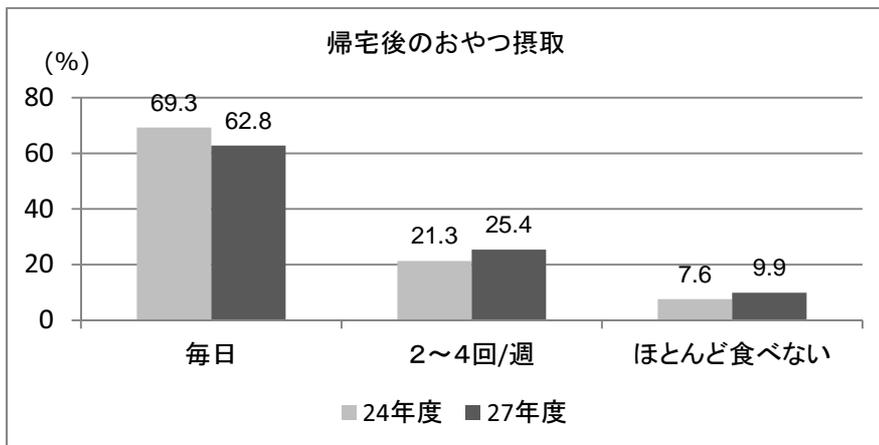
朝食を「家族全員で食べる」子の割合は、26%であり、「大人の家族の誰かと食べている」を合わせると82%でした。



※共食とは、家族が食卓を囲んで一緒に食事をしながらコミュニケーションを図ることを言います。

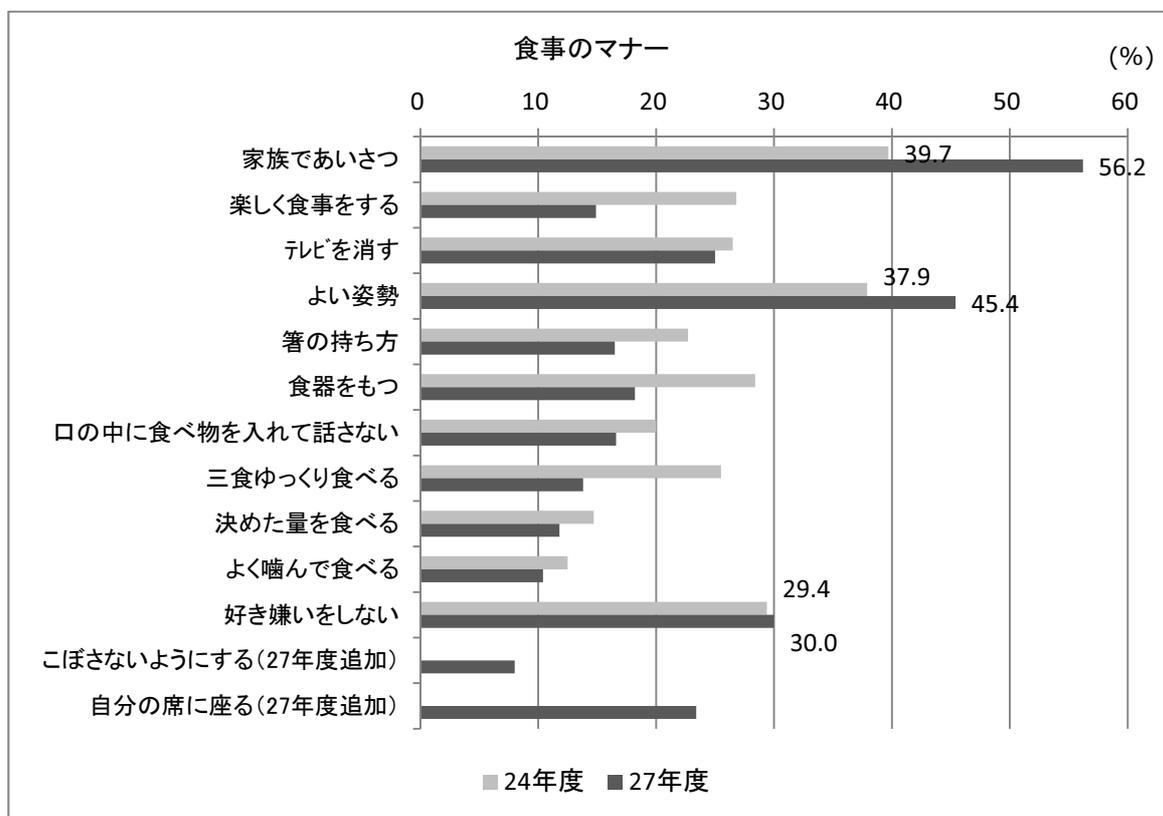
オ おやつ習慣

毎日おやつを食べる習慣がある子は62.8%と、平成24年度よりは低くなっています。おやつを食べる時間帯は、保育園等からの帰宅後、夕食までの間が一番多く、約8割弱を占めています。



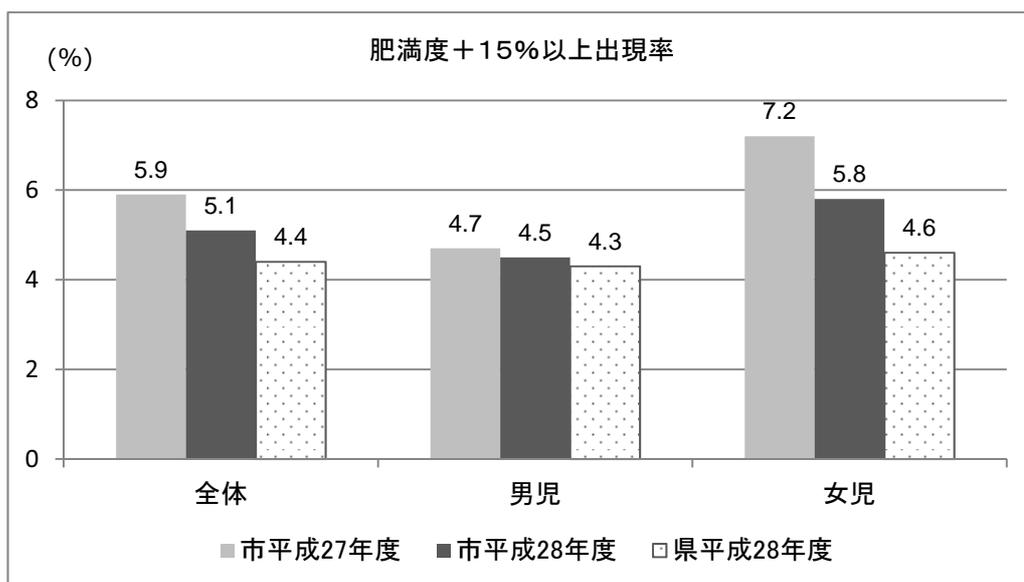
カ 食事のマナー

食事のマナーで心掛けていることでは、「家族であいさつをする」の割合が平成24年度と比較して高くなっています。しかし、「箸の持ち方」や「食器を持つ」の割合は、低くなっています。



(5) 身体状況(3、4、5歳児)の肥満出現率

肥満度15%以上の子が県平均より高い割合です。特に女兒が高い割合です。



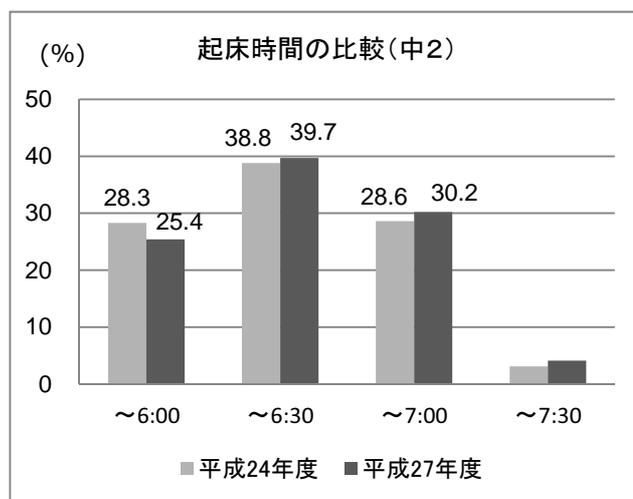
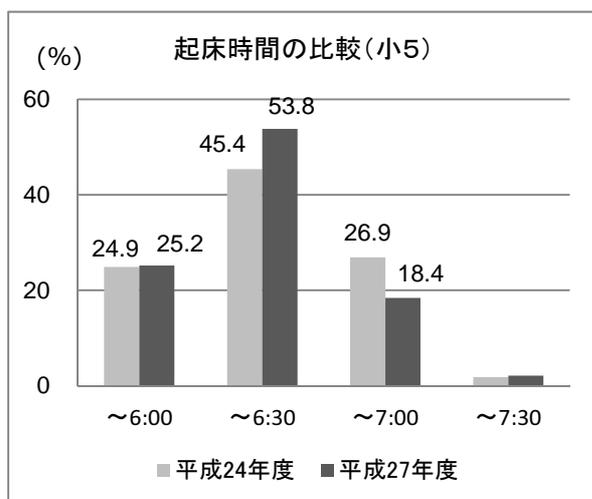
学童・思春期

(1) 児童生徒の食生活実態調査結果（平成27年度柏崎市教育委員会）から

ア 生活リズムの状況（起床時間・就寝時間）

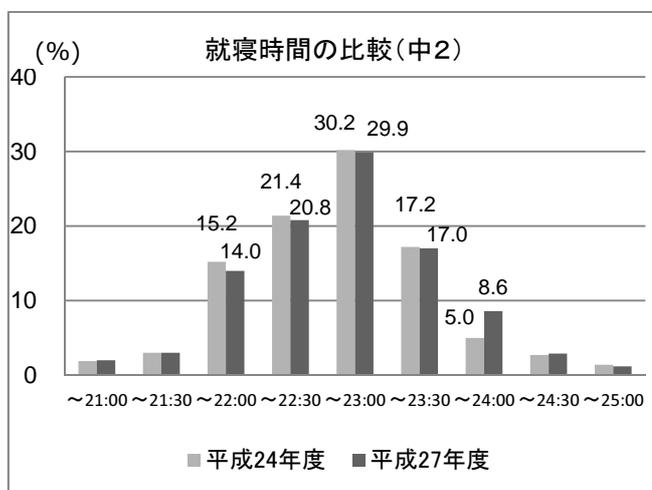
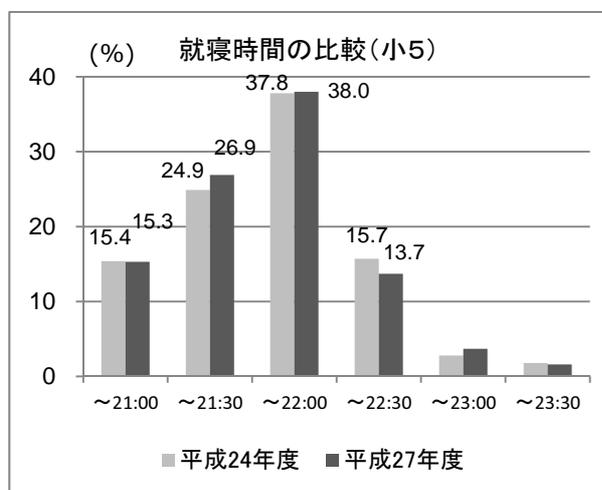
小学5年生の起床時間に関しては、平成24年度と比較して、6時30分までに起きる子が増加しています。

中学2年生に関しては、平成24年度と比較し、6時30分までに起きる子が65.1%と若干減少しています。



小学5年生で22時までに寝る子の割合は、平成24年度の78.1%から、平成27年度では80.2%と増加しています。

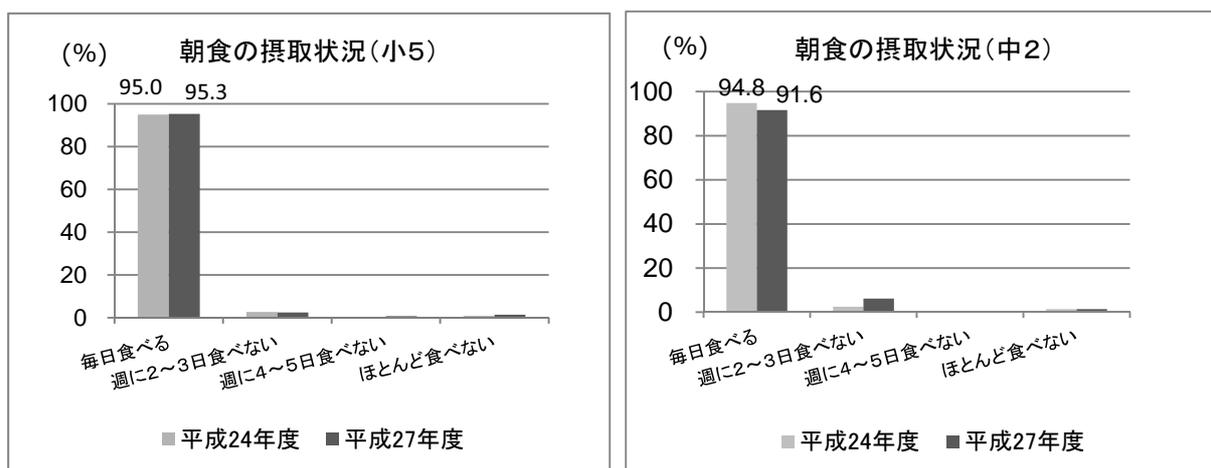
中学2年生で23時までに寝る子の割合は、平成24年度では71.7%から平成27年度69.7%と若干減少し、24時までに寝る割合は増加しています。



イ 朝食の摂取状況

朝食を毎日食べる小学5年生の割合は、95.3%でした。中学2年生では91.6%で、欠食することがある割合が平成24年度より若干増加しています。

しかし、朝食摂取の全国平均値は、小学5年生90.5%、中学2年生86.6%であり、当市の方が欠食が少ない状況となっています。

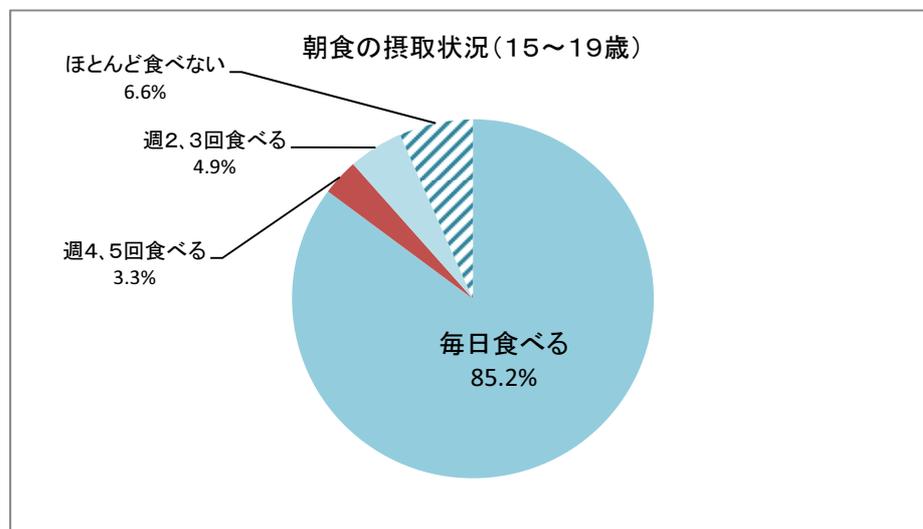


朝食を欠食する理由は、「食欲がない」「食べる時間がない」が多く、一部に「いつも食べない」「用意されていない」「太りたくない」等が挙げられています。

起床時間と朝食の関連を見ると、7時半以降に起床すると欠食する割合が高くなります。小学5年生では起床時間が7時から7時半まででは13%、7時半から8時まででは67%、中学2年生では7時から7時半まででは26%、7時半から8時まででは、全員が朝食を欠食していました。

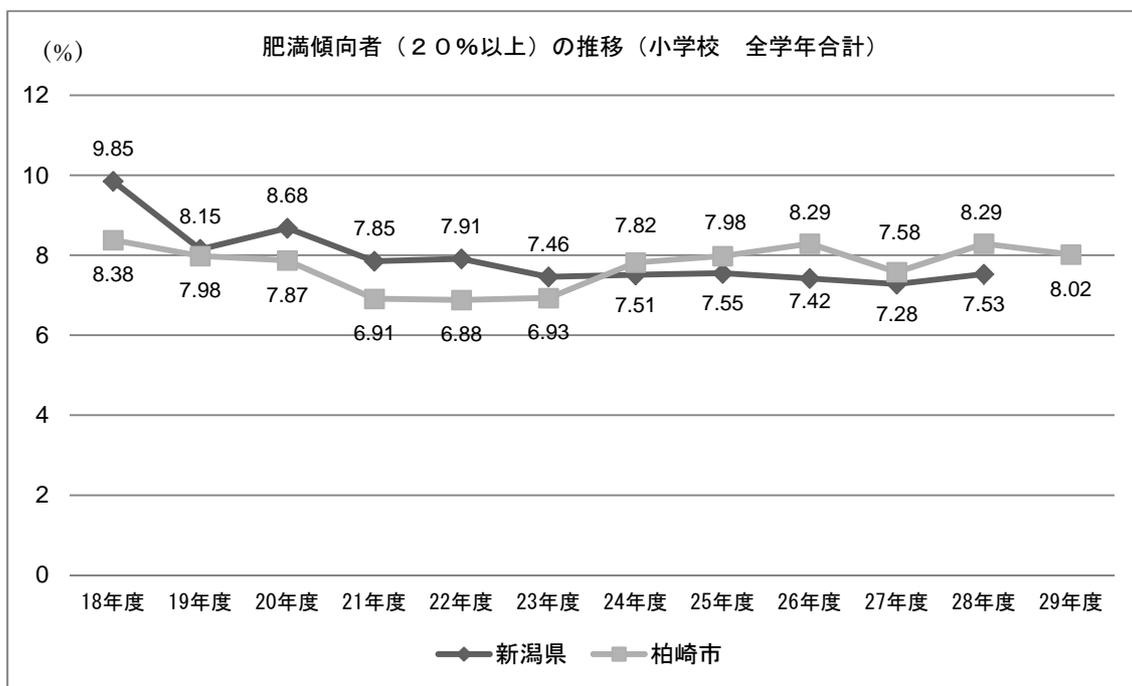
ウ 15～19歳の朝食の摂取状況（食育推進アンケート結果から）

毎日食べる人の割合は85.2%でした。ほとんど食べない人が6.6%います。

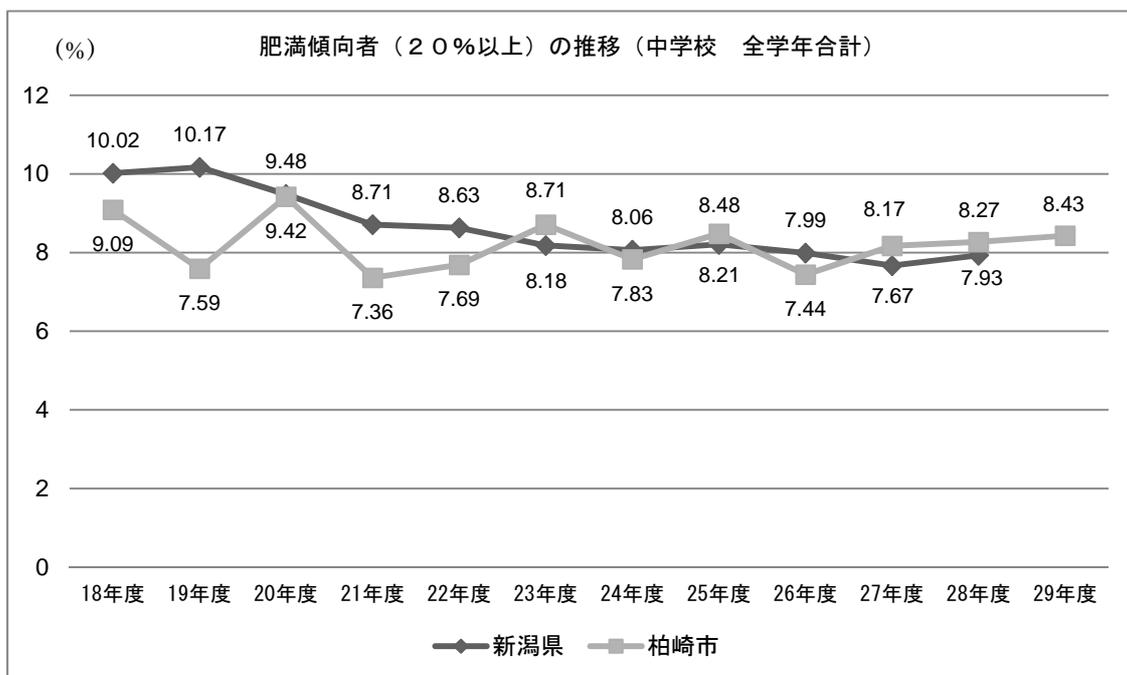


(2) 身体状況

小中学校の肥満傾向者の割合は、これまで県平均よりも低い値で推移していましたが、最近では県数値の低下に伴い、県平均より上回ってきています。



(平成29年度健康診断結果集計表)



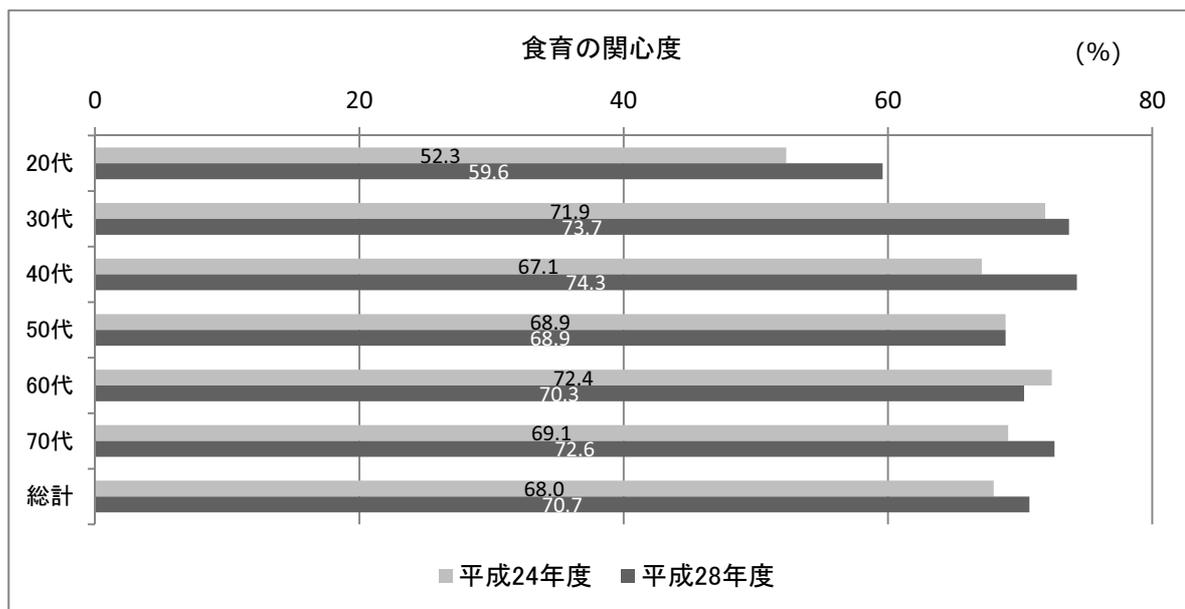
(平成29年度健康診断結果集計表)

青壮年期・高齢期

(1) 食育推進アンケート（平成28年度）の実態から

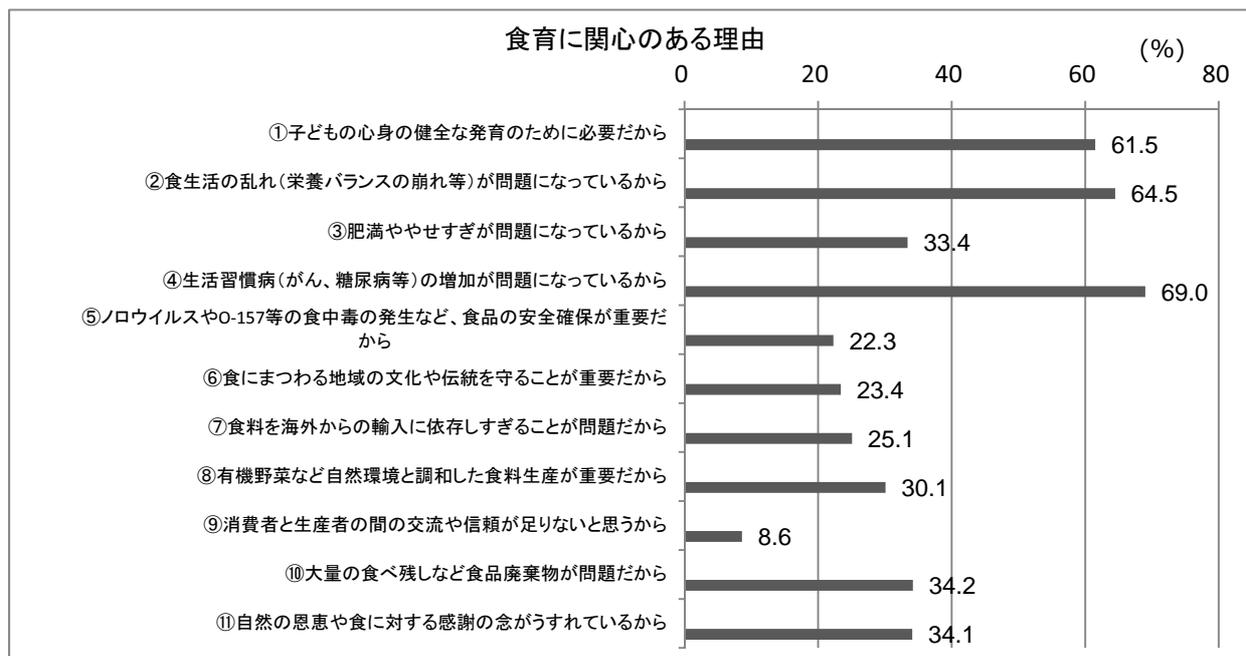
ア-1 食育への関心

平成24年度と比較して、食育の関心度が高くなっています。特に20歳代の若い世代と30歳代、40歳代の子育て世代の関心が高くなっています。



ア-2 関心のある理由

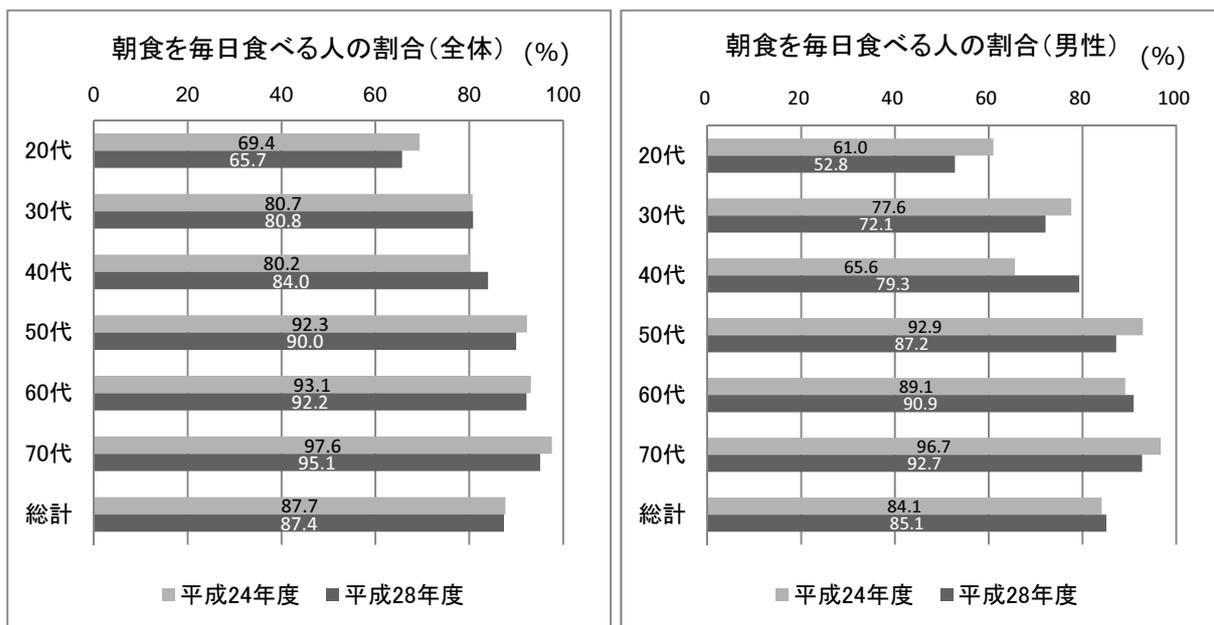
関心のある理由は、生活習慣病の増加や食生活の乱れ（栄養バランスの崩れ等）が問題になっている割合が高い状況です。



イ 朝食の摂取状況

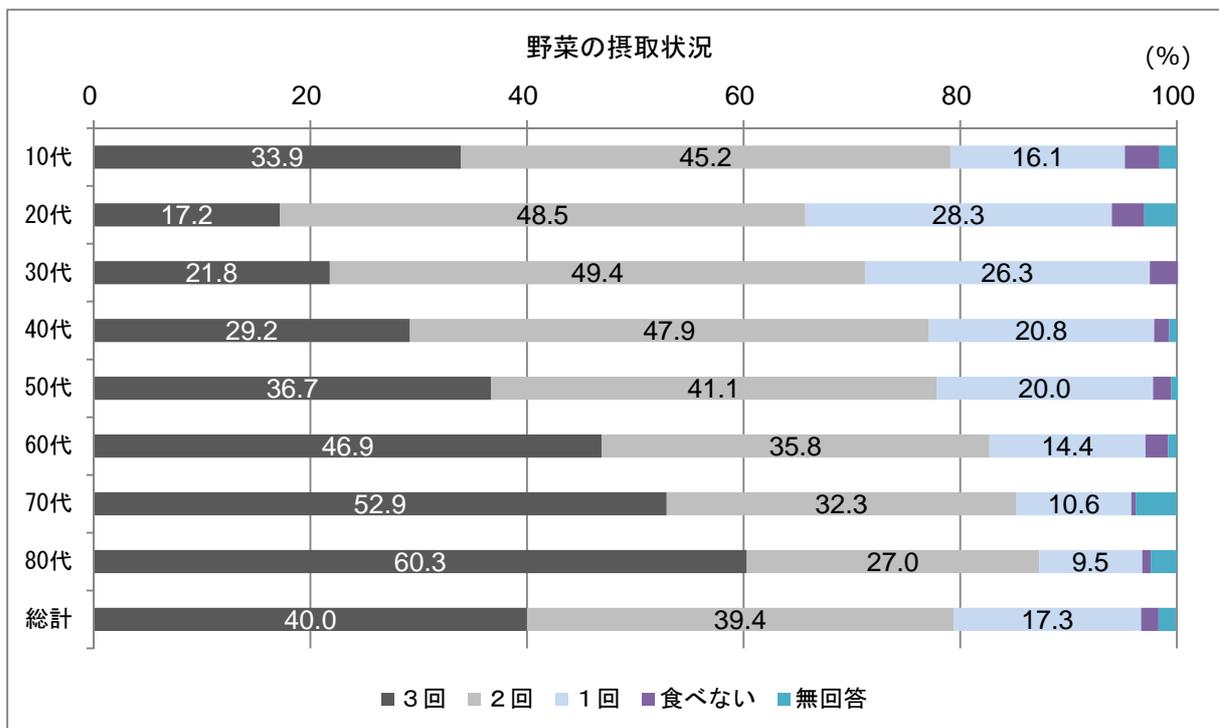
全体的に朝食の欠食は改善してきているものの、依然として20歳代の朝食の摂取率が低くなっています。

男性については、平成24年度と比較して、摂取状況の統計は改善しているものの、20歳代、30歳代で摂取率が低くなっています。



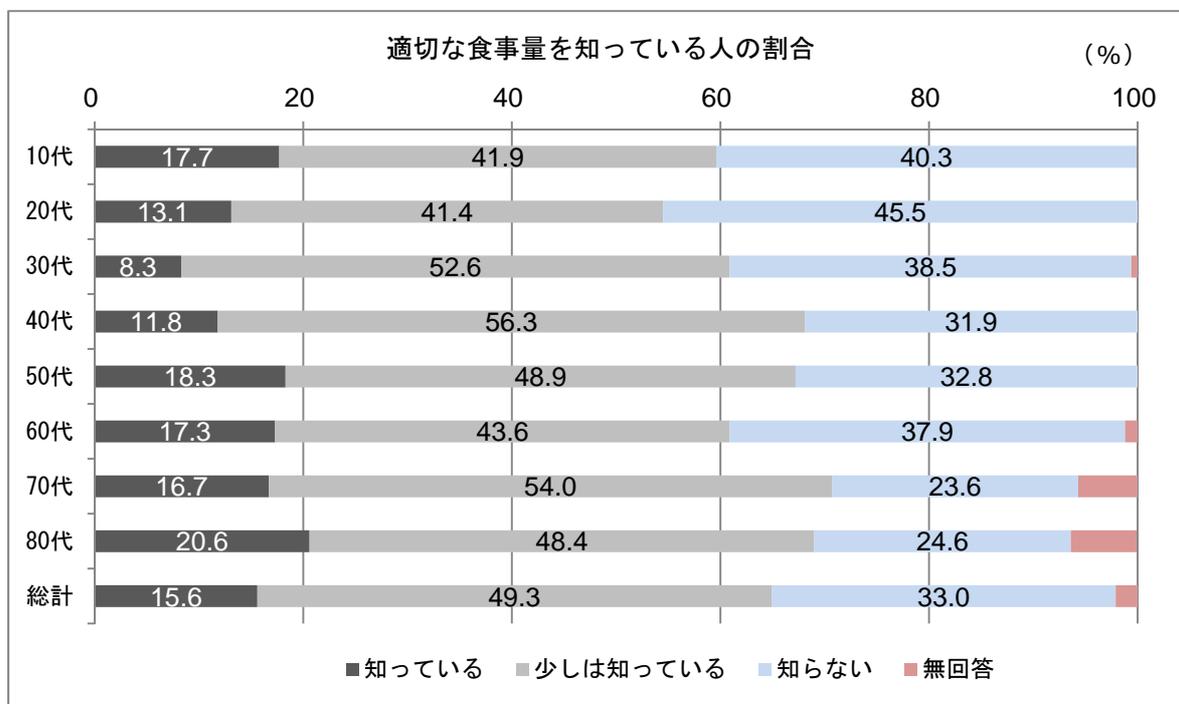
ウ 野菜のおかずの摂取状況

20歳代以降では年代が上がるにつれて、野菜のおかずの摂取回数は増加していますが、若い世代では摂取回数が少ない状況です。



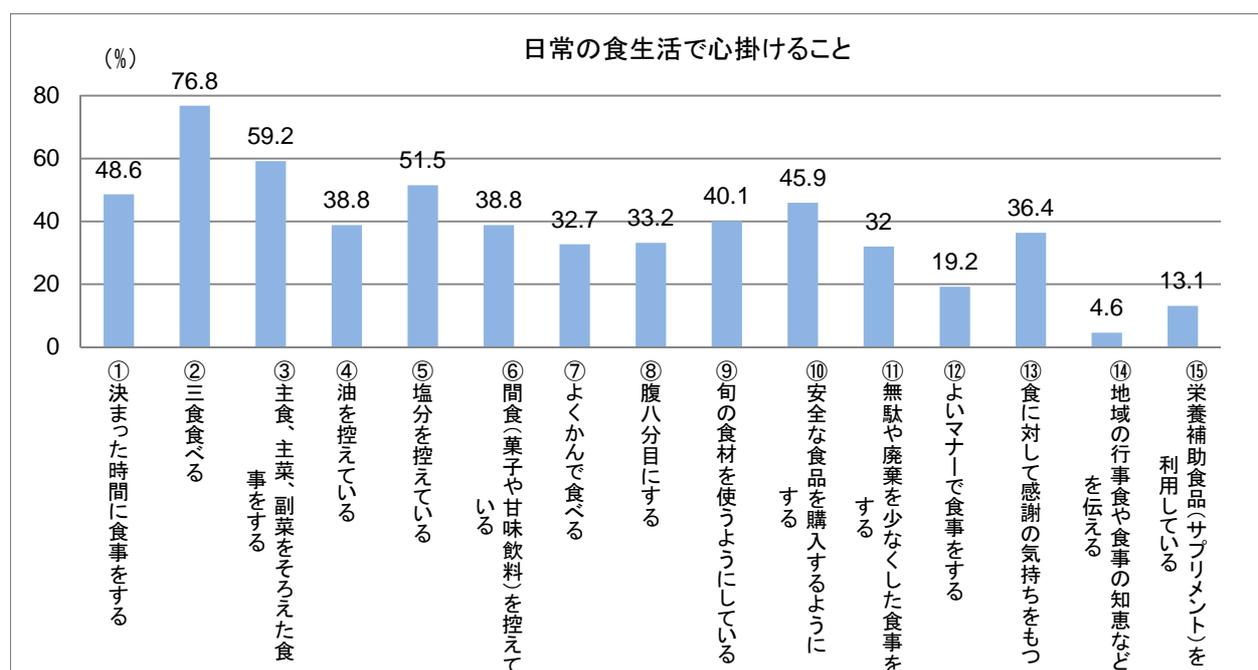
エ 自分の適切な食事量

健康を保つために自分の一日の必要摂取エネルギー量を知っている人は、どの年代も約1、2割です。少しは知っている人と答えた人を合わせると64.9%が知っていますが、20歳代ではやや低い状況です。



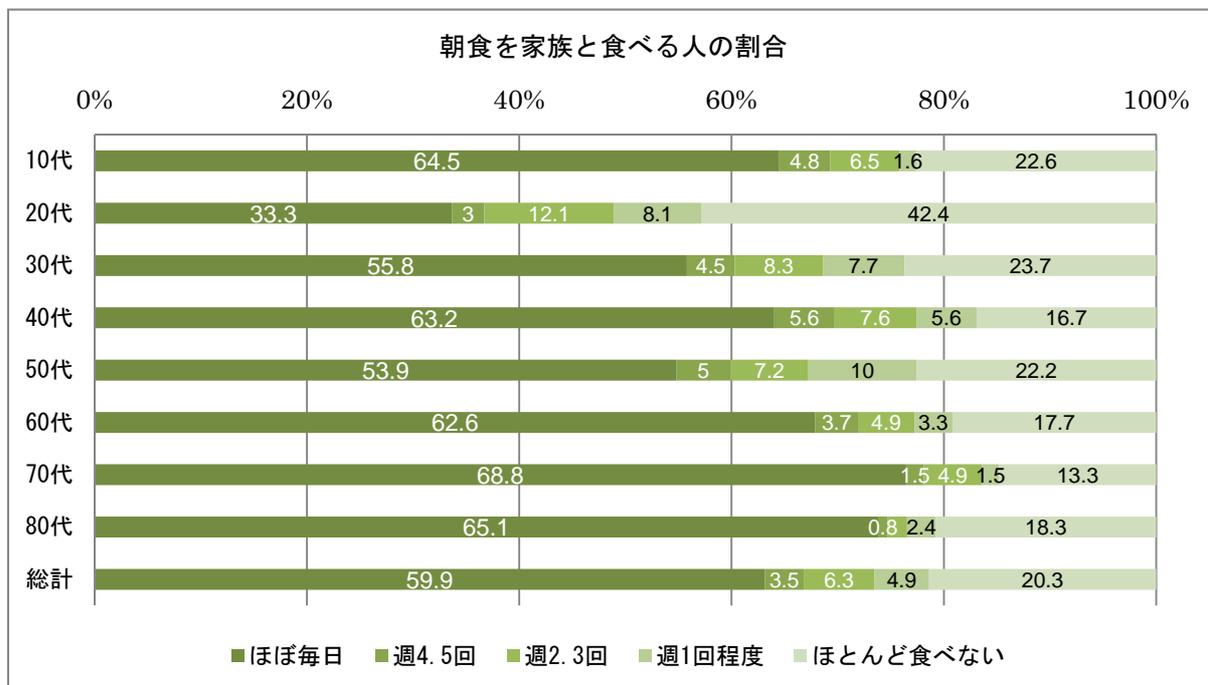
オ 日常の食生活で心掛けていること

「一日三食食べる」ことを心掛けている人が一番多く、次いで「主食、主菜、副菜をそろえた食事をする」「塩分を控えている」が多くなっています。塩分を控えている人は、平成24年度の40.8%と比較して10.7ポイント増加し、約5割います。

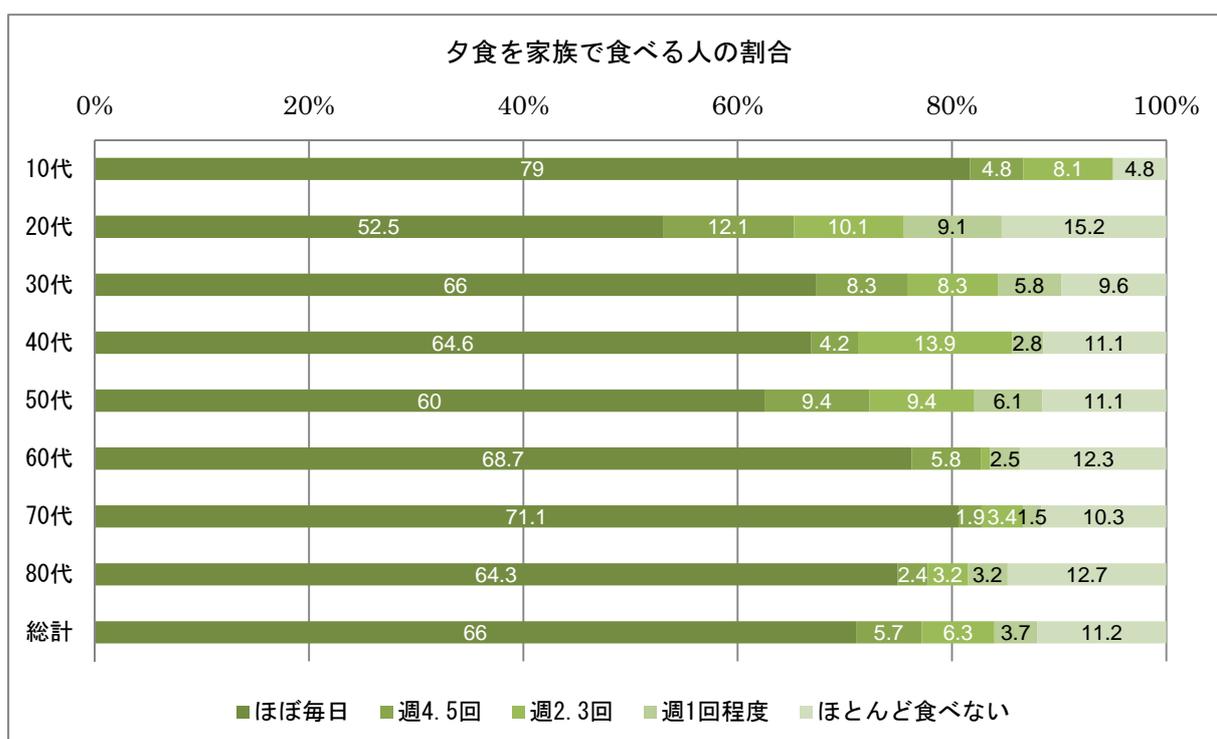


カ 二人以上での共食の状況

朝食を「ほぼ毎日」、家族二人以上で食事をする人は59.9%ですが、20歳代では「ほとんど食べない」「週1回程度」と回答した人が50.5%います。

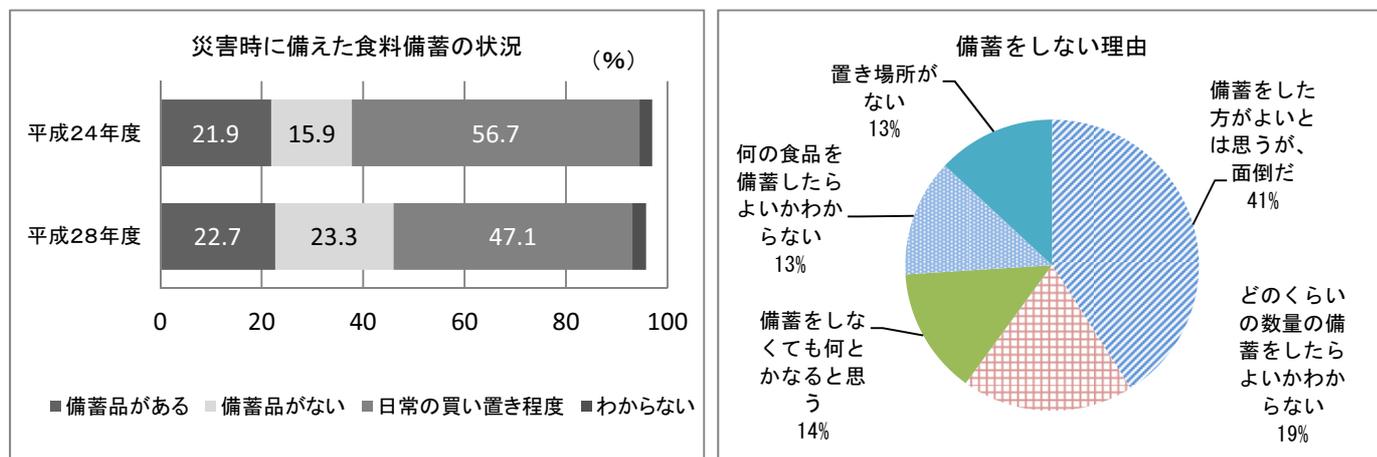


夕食を「ほぼ毎日」、家族二人以上で食事をする人が10歳代で79.0%と最も多く、20歳代になると52.5%に減少し、「ほとんど食べない」「週1回程度」と回答した人が24.3%います。



キ 災害時の食料備蓄の状況

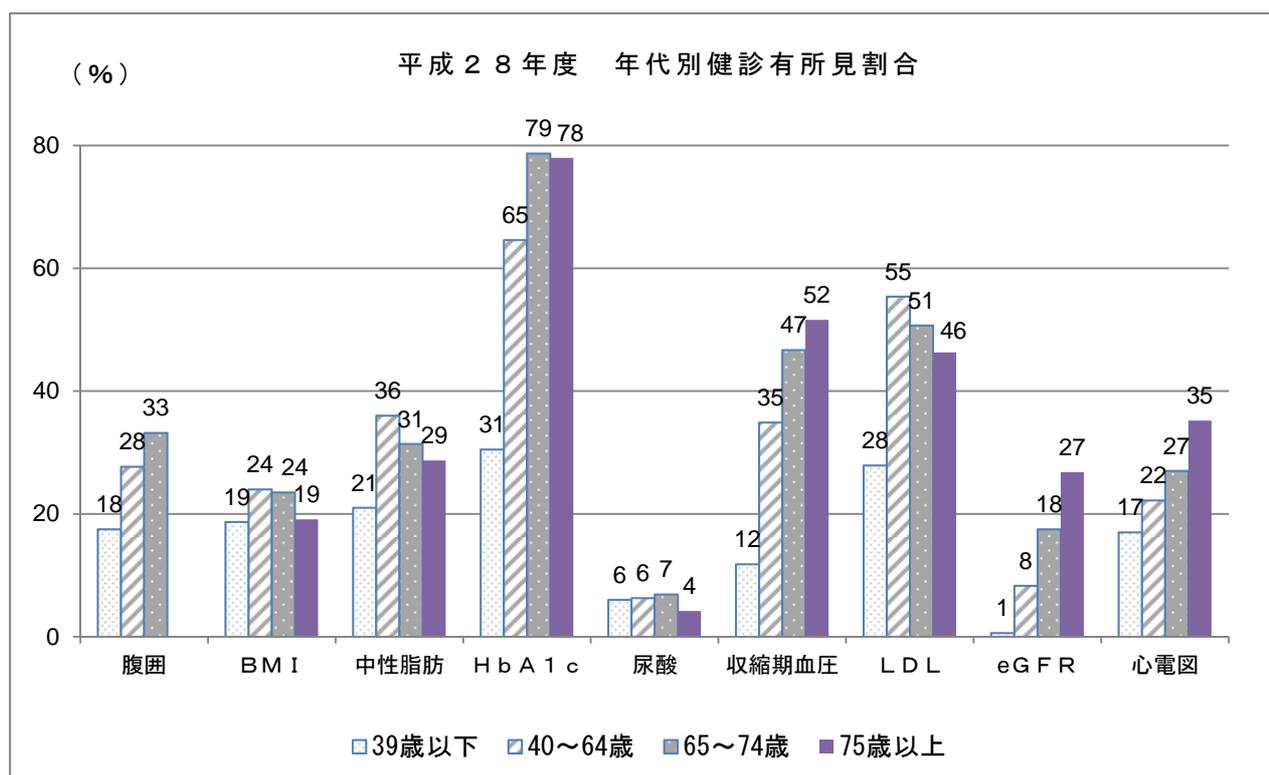
災害時に備えた食料備蓄状況は、平成24年度と比較して、備蓄品がない人の割合が増加しています。理由とすると、「備蓄をした方がよいと思うが面倒だ」と回答している割合が高く、次に、「どのくらいの数量を備蓄したらよいかわからない」の順になっています。



(2) 平成28年度柏崎市健康診査結果から(受診者9,370人)

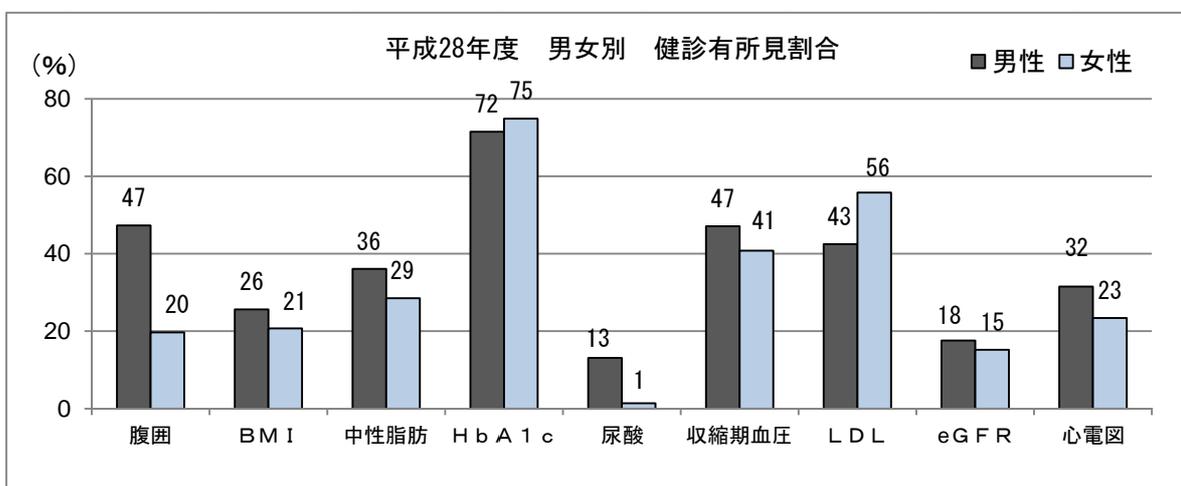
ア 年代別健診結果有所見者の割合

年代別に比較すると、青年期でも摂取エネルギー過剰に関する項目(腹囲、BMI、中性脂肪)で約2割、HbA1c(糖代謝)、LDLコレステロール(脂質代謝)では約3割が基準値を超えています。壮年期以降では、メタボリックシンドロームに関連する、HbA1c、血圧、LDLコレステロール等の項目で、有所見割合が、更に増加しています。



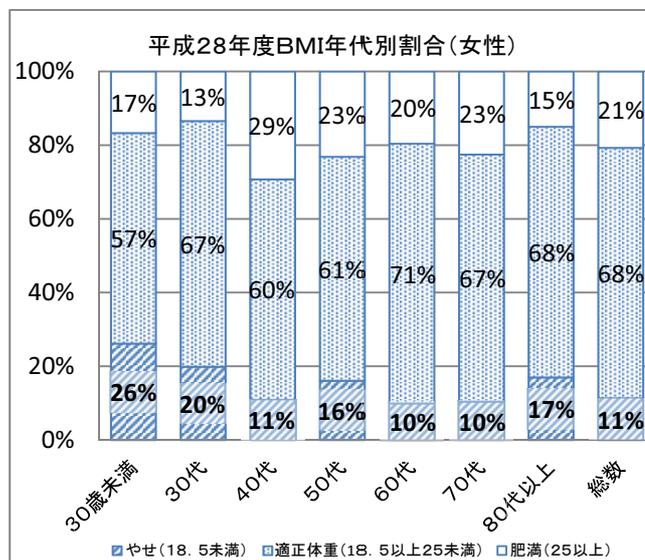
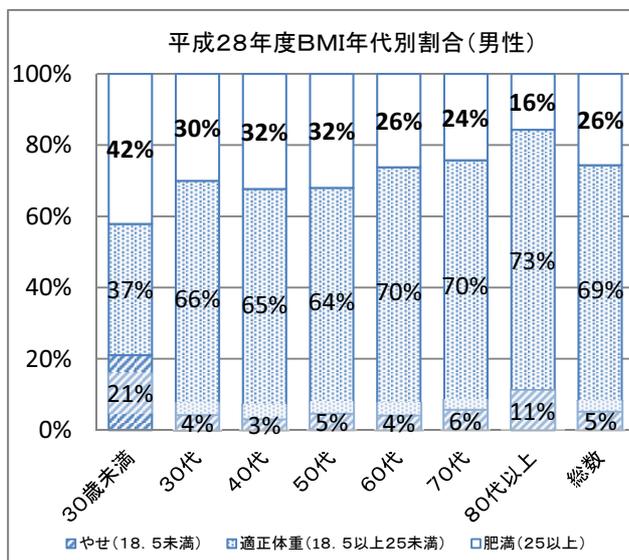
イ 男女別健診結果有所見者の割合

男女別に比較すると、全体的に男性の有所見割合が高い傾向があります。しかしHbA1c、LDL コレステロールに関しては、女性の有所見割合の方が高くなっています。



ウ BMIの性別・年代別割合

男女とも約7割の人が適正体重です。平成23年度と比較して、男性は60歳代以外、女性は50歳代以下で肥満が増加しました。性別では肥満は男性、やせは女性の方が多い傾向が見られます。



[参考]人数		30歳未満	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
男性	やせ	4	3	5	10	69	86	22
	適正	7	46	106	141	1,182	1,082	145
	肥満	8	21	53	71	444	374	31
	計	19	70	164	222	1,695	1,542	198
女性	やせ	11	43	24	62	247	184	47
	適正	24	144	131	234	1,781	1,210	186
	肥満	7	29	64	89	493	405	42
	計	42	216	219	385	2,521	1,799	275

2 食の地産地消の現状（第二次食の地産地消推進計画から抜粋）

（1） 農林水産物の生産に関する現状

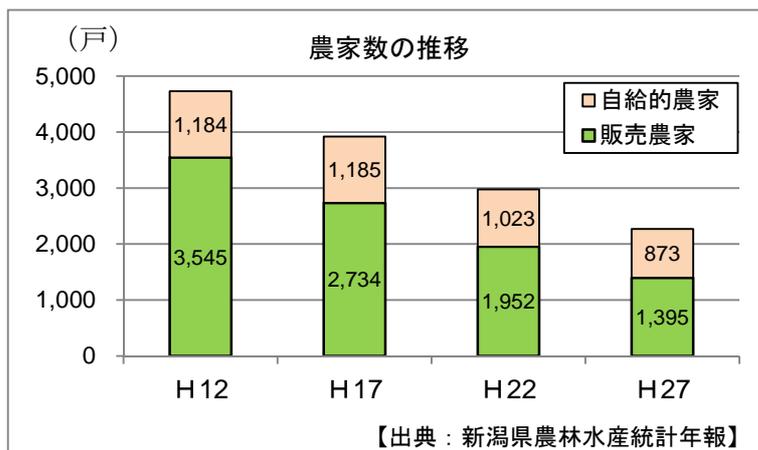
ア 経営状況

本市の農業は、水稻栽培を中心とする農業経営が主であり、近年の米価下落は農家所得の減少に直結しています。更に、平成30年から米の生産調整の廃止が決定し、米の産地間競争が一層激しくなるなど、農業経営を取り巻く環境は厳しさを増しています。

また、水産業では、水産資源量の減少、生産資材の高騰など、経営状況の低迷が続いています。

イ 生産者

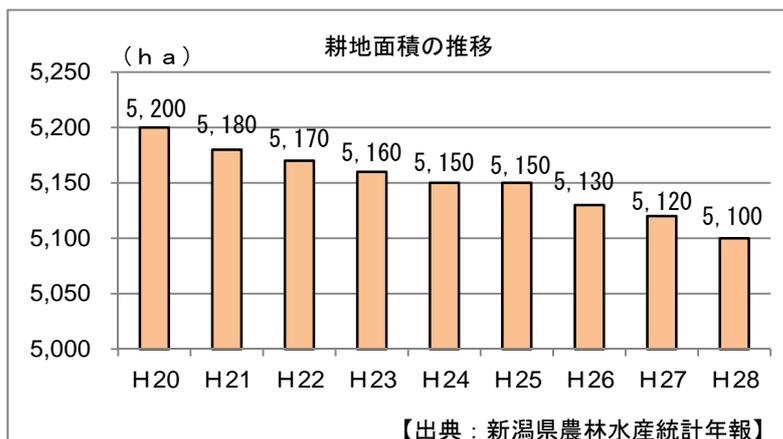
農業では、就業者の高齢化が急速に進み、平成27年には60歳以上の農業者は1,680人で全体の87%を占めています。平均年齢は68.5歳となっており、現在の市の農業は60歳以上の就業者に依存している状況です。農家人口



の減少も進み、販売農家数は1,395戸と少なくなっており、担い手へ農地の集積を進めている状況です。

水産業においても、漁業就業者数が平成10年の120人から平成28年では63人と半減し、高齢化と担い手不足が進行していることから、担い手を確保しながら、世代交代を進める必要があります。

ウ 農地



農地の耕地面積は、減少傾向にあります。平成28年度の耕地面積は5,100ヘクタール、耕作放棄地は596ヘクタールとなっています。離農者の農地が担い手に引き継がれていない状況です。

エ 生産物

(ア) 米

本市の農業の主力である水稻栽培においては、トップブランドである「コシヒカリ」のほか、「こしいぶき」や県内で一番早く収穫・出荷できる「越路早生」など、多種多様な品種を生産しています。また、農業関係者と協議を行い、柏崎市独自の米の認証制度を創設し、ブランド化に向けた取組を進めています。有機栽培や低農薬、低化学肥料栽培など、環境保全型農業への取組を拡大しています。

(イ) 野菜

近年の複合経営の推進により、販売用の野菜が増加し、たまねぎ、枝豆、カリフラワーなどの8品目を重点品目と位置付け、生産販売体制の強化に努めています。

(ウ) 畜産

畜産業については畜産業者が少なく、平成28年では乳用牛は飼養農家4戸、肉用牛は飼養農家3戸、食用豚の飼養農家はありませぬ。ブロイラーの鶏飼養農家は1戸、採卵鶏の飼養農家は2戸です。

(エ) 水産

3トン未満の小型漁船を中心とした刺網、一本釣漁業のほか、10トン程度の中型漁船による五智網漁業が営まれ、マダイ、ヒラメ、カレイ類、メバル等が多く漁獲されています。また、夏場を中心にサザエ、モズク等の採介藻漁業も盛んに行われています。漁獲量(属人)は、180~200トン前後で推移しています。

(オ) きのこと

きのこ類の生産は、現在は1戸の生産者で生しいたけを年間3.5トン生産するのみとなっています。



たまねぎの収穫作業



マコモタケの定植

(2) 農林水産物の流通と販売に関する現状

ア 流通

米の流通については、柏崎全体の出荷量は約1万6千トンと見込まれ、一部をブランド化して有利販売を行っています。出荷だけではなく、農業者独自で親戚や知人などに直接販売することも多く、市内の飲食業者への直接販売も多く見られます。近年では、インターネットでの販売も増えています。

園芸作物については、産地化された作物が少なく、市外への出荷は多くありません。近年ではたまねぎの生産拡大が進み、青果市場を通して市外への出荷が増えています。

水産物については、季節、天候、資源量といった自然条件に左右されることや、鮮度管理にも気を配る必要があるため、安定的な供給を行うことが難しいという面があります。柏崎の近海で漁獲された水産物は、主に柏崎魚市場に出荷され、市内を始め、県内外へ流通します。

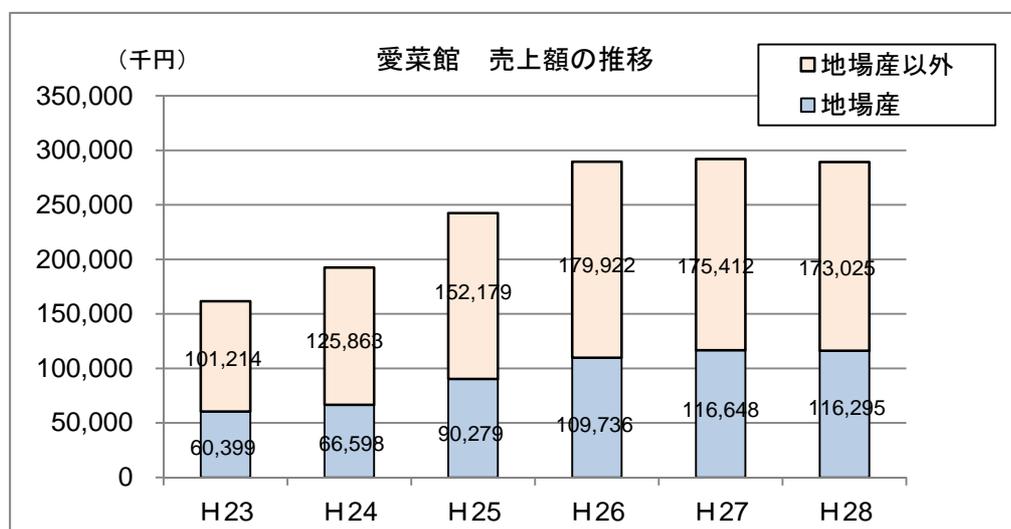
イ 小売での販売形態

農業経営者が市内スーパーと契約し、直接店頭へ出荷をするインショップなどの取組が行われています。また、地場産の食材をまとめたコーナーを作り、販売促進を図るスーパーが増えています。

水産物についても、市内の量販店では「柏崎産」のラベルを付けた水産物が陳列されるなど、地元産を分かりやすくPRする店舗が増えています。

ウ 直売所

農産物直売所について、JA柏崎の「愛菜館」が基幹的な直売所となっています。平成28年度の販売額は2億8,932万円となり、平成22年のオープン以来、大きく増加しています。しかし、農産物の地場産割合は売上額ベースで5割を下回っており、夏野菜などは一時期に出荷が集中するなど、課題があります。



愛菜館以外では、平成25年には市内に17か所の直売所が運営されていましたが、高齢化や後継者不足により、平成29年現在では9か所での運営となっています。

水産物については、漁業者による直売所の整備が全国的に見られるようになってきました。柏崎では開設場所や販売員の確保が難しく、現時点では常設されていませんが、柏崎港敷地内にある観光交流センター「夕海」を活用し、「かしわざき港おさかな祭り」や、平成29年度から朝市を開催して、地場水産物の直売を行っています。

エ 農林水産物の消費に関する現状

(ア) 消費者ニーズ

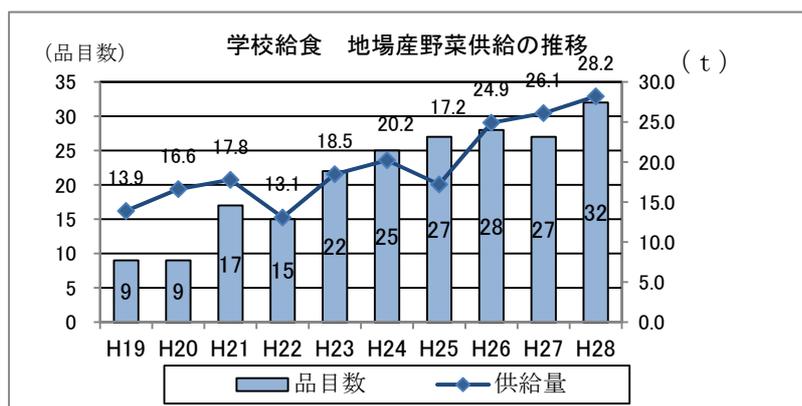
近年、食の安全性、信頼性への関心が高まり、減農薬、無農薬の農産物や、生産者の顔が見える安全で安心な食材、それらを使用した加工品を求める消費者ニーズが高まっています。

また、健康意識の高まりから、栄養面を考慮して食材を選ぶことや、旬の食材を新鮮なうちに入手したい、生産者からおいしい食べ方を聞きたい、といったニーズもあります。

水産物では、「家庭での調理が難しい」「調理に時間が掛かる」「食べにくい」といった理由から、消費が伸び悩んでいると言われています。しかし、魚は身体に良い成分が含まれており、栄養面で非常に優れた食材であることから、日本型の食生活を支える健康食材として見直されています。

(イ) 学校給食

学校給食における地場産野菜の使用量は、平成24年度は20トン、使用割合は野菜全体の12.3%でしたが、平成28年度には28トン、使用割合は17.3%と、徐々に使用量が増加しています。納入品目では、基本8品目（大根、人参、キャベツ、ねぎ、じゃがいも、たまねぎ、里芋、白菜）に加え、季節品目を合わせると、32品目が使用されていますが、学校給食の野菜は、一定の規格・品質が求められるため、調理場の発注に対して、まだまだ供給が不足しています。米飯では、児童、生徒に柏崎の主力品種であるコシヒカリに親しみを持ってもらうため、全量柏崎産のコシヒカリを使用しています。



地場産給食デー

水産物については、谷根川のさけを生態学習と併せて地元食材として使用しています。それ以外の水産物については、納入価格と納入形態の調整が課題となっており、供給が進んでいません。

(ウ) 地場産食材の普及啓発

地場産農林水産物の認知度や利用度を増加させるための情報発信が少ない状況です。小売店においても、地場産食材であることの表示が充実していないところも見られます。

スーパーにおいては、地場産コーナーやインショップを設け、消費者へのPRが充実している店舗も見られますが、あまりPRしていない店舗もあるなど、温度差が目立ちます。

(エ) 飲食店などでの地場産食材の利用

地場産農林水産物を提供する飲食店が増えてきましたが、年間を通じて供給が安定している食材が少なく、積極的な利用が難しい状況です。また、利用していてもメニューなどで柏崎産と表記がなく、消費者へ地場産と伝えていない店舗が多く見られます。米の供給は安定していますが、ブランド力が弱いと認識している飲食店も多く、柏崎産米を積極的に消費者へPRする店舗が多くありません。

(3) 食文化の継承

地域の食文化に関心を持ち、郷土を愛する心を育むことは、食文化を通じた地域振興につながります。

しかし、郷土料理をよく食べる割合は、年齢が低くなるにつれて下がり、食べない理由としては、10歳代、20歳代は「食卓に上がらない」「郷土料理を作れない、知らない」の順で高く、30～60歳代は「郷土料理を作れない」が一番多く、70歳代では「教わる機会がない」が理由として挙がりました。

(資料編:アンケート結果参照)

